



愛知県立芸術大学 創立50周年によせて

千

字 万 感

愛知県公立大学法人
理事長 鮎京 正訓

愛知県立芸術大学は、今年4月に創立50周年を迎えました。名古屋フィルハーモニー交響楽団が、この5月に同様に創立50周年を迎えましたが、今年は、愛知県では、あいちトリエンナーレや全国障害者芸術・文化祭あいち大会など多彩な行事が予定されています。

県立芸術大学学長の松村公嗣さんは、日本画家ですが、県芸大創立のすぐ後に入学され、片岡球子先生の薫陶を受けられました。松村さんは、月刊文藝春秋の毎号の表紙絵を描かれているので、ご存知の方も多と思います。松村さんの画風は、日本画の伝統をしっかりと受け継ぎながら、筆の運び、構図ともに、極めて繊細かつ格調高いものです。松村さんは、私より少し年長ですが、その飾らないお人柄に感銘を受け、今ではすっかり松村さんのファンになりました。

昨秋、松村さんをウズベキスタンにお連れして、ウズベキスタン国立美術工芸大学を訪問し、県芸大とこの美術工芸大学との学術交流協定を調印していただくことができました。

現地の美術工芸大学に行き、松村さんや同行した和紙を専門とする柴崎幸次さんがウズベキスタンの教授たちと交流する様子は、まことに興味深いものでした。私は専門が法律学ですが、社会科学の分野で外国の大学との学術交流を行う場合には、通常、ワークショップやシンポジウムなどで、相互に20分とか30分の研究報告をしかつめらしく行うのですが、この時の交流の仕方は、それとは全く異なるものでした。

日本とウズベキスタン側から、それぞれに自分の作品を見せるや否や、みんながわっとその作品に近づき、会議などはそっちのけになり、立ち話が延々と続きます。「これはどうやって作ったんだ」「この線はどのように引いたんだ」「絵具は何を使っているのか」などなど、極めて具体的で、かつ率直なやりとりが行われていました。もっとはっきり言うと、芸術の世界は、相互の作品を見せ合うだけで、それぞれの作家の力量が瞬時にわかるような世界であると思いました。

今年は、松村さんと、モンゴルやミャンマー、ラオスに行き、現地の芸術家、芸術大学と交流してくるつもりです。私は名古屋大学時代に法律分野のアジア諸国との交流に努めてきましたが、今度は、芸術の分野でアジア諸国との交流にお役にたてれば、と気持ちを新たにしています。

県芸大の半世紀に及ぶ芸術文化に関するこれまでの教育・研究をさらに発展させ、次世代に継承していきたい、と願っています。